

//REPORT//

## 令和4年度ユネスコスクールオンライン意見交換会

10/14 開催 第2回 ユネスコスクール実践報告②

「別子銅山・近代化産業遺産を活かした持続可能なまちづくり学習」



ユネスコスクール事務局では、令和2(2020)年度より、ユネスコスクールオンライン意見交換会を1～2か月に1回のペースで実施しています。今年度第2回目はユネスコスクール実践報告②「別子銅山・近代化産業遺産を活かした持続可能なまちづくり学習」と題して、10名の参加者と対話の場をもちました。

### ■プログラム

開催日時:2022年10月14日(金) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	<b>オープニング</b> 趣旨説明 ACCU教育協力部 部長 大安 喜一
16:05	<b>事例紹介</b> 愛媛県立新居浜南高等学校 河野 義知 氏
16:20	<b>コメント</b> 愛知教育大学理科教育講座 教授 地域連携センター長 大鹿 聖公 氏
16:25	<b>グループディスカッション</b> 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:45	<b>振り返り</b> グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。 (良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:00	<b>クロージング</b>

## ■ 事例紹介

愛媛県立新居浜南高等学校 河野義知先生よりご発表いただきました。

以下、概要です。

---

「別子銅山・近代化産業遺産を生かした持続可能なまちづくり学習～『学びの絆サイクル』の循環を目指して～」をテーマに、地域資源を教育資源とすることで、地域との連携を図っていくことや、地域と連携した活動の発信について紹介させていただきます。キーワードは「つなげる・広げる・組織連携」です。

愛媛県新居浜市は、四国最大級の工業都市であり、繁栄の基礎は「別子銅山」です。別子銅山は江戸時代から昭和時代まで、約 300 年の歴史をもっています。新居浜市内には別子銅山により生み出された近代化産業遺産が数多く残っています。本校はその別子銅山のふもとにあり、1964 年に普通科高校として創設されました。1996 年には総合学科に移行し、今年で 27 年目になります。本校では、8 つの系列から自分の進路や興味・関心に合った系列を選択することができます。本日はその中から「地域共創系列」の取組を中心に紹介させていただきます。

はじめにユネスコスクールの活動の始まりについて紹介します。1996 年に総合学科に移行した際、学校紹介のホームページの作成を「情報科学部」が行い、1999 年に、そのホームページ内で別子銅山をテーマに地域を紹介したことが活動の始まりとなっています。その後、地元の新居浜ユネスコ協会さんとのご縁ができ、ユネスコスクール加盟への活動を支援していただきました。そして 2010 年にユネスコスクール認定をいただくことができました。これを受け、情報を世界へ発信したいということで、2011 年に「情報科学部」を「ユネスコ部」へと改称しました。2017 年には新居浜市内全ての小中学校がユネスコスクールに認定されています。

次に、ユネスコスクールの活動を持続可能なものにする仕組みづくりについて紹介します。当初はユネスコ部がリーダー役として活動をしていましたが、より多くの生徒がふるさとの学びを共有できるよう「カリキュラム化」し、持続可能な学びを目指しました。その学びが「地域共創系列」(2018 年創設)です。ユネスコ部と地域共創系列が二人三脚でふるさとの心を共に次につなぐ活動をしています。地域共創系列は、6 つの教科で構成されており、教科を横断的につなげ、そのつながりを学校の外に広げ、様々な組織と連携して活動をしています。

そして、「地域と協働した活動」として、産官学の連携について紹介します。まずは行政との連携として、地元の高校生を対象とした「別子銅山産業遺産創造塾」(2015 年スタート)があります。フィールドワークやグループ活動などを通して、シビックプライド(まちへの愛着と誇り)を育み、将来の地域の語り部を育成することを目的にしています。この塾での学びを活かすことができるのが、学校との連携です。「小学校ふるさと学習」では、小学生は高校生と一緒に小学校周辺の別子銅山の近代化産業遺産を巡ります。地元の公民館が主体となり、小学校と高校をつないでくれています。公民館が関わっているため、地域住民の皆さんに小学生の移動中の安全見守りとしてご参加いただき、地域を巻き込んだ活動になっています。この活動は 15 年続いています。中学校では、10 年前より、ふるさと学習の一環として、「別子銅山登山活動」が始まりました。高校生が中学校へ行き別子銅山に関する

学びのサポートを行っています。タイミングが合えば、高校生が中学生に別子銅山登山学習のガイドも行っており、高校生は中学生にとってのよいロールモデルになっています。愛媛大学とも 20 年以上連携しており、大学生と共に別子銅山のガイドブックを紙媒体で制作しています。昨年はこのガイドブックが小学校や中学校で配布されました。ガイドブックの特徴は、SDGs を関連付けている点です。先人たちが既に SDGs の取組を行ってきたから今のふるさとのあるということ意識してもらおうことで、シビックプライドを高め、自分事として一步を踏み出すきっかけにしてほしいという願いがこめられています。ガイドブックは地域の様々なところに広がっており、例として、地元企業の新人研修等で利用される「ご当地検定」の公式テキストブックに採用されました。また「ご当地検定」が発展した小学生向けの検定もあり、市内の小学 6 年生全員が受験しています。今年からは、市内の小学 4 年生を対象とした地元企業による出前授業も始まっています。さらに、本校の地域共創系列では、「高校生まちづくり観光プロジェクト」も行っています。高校生が主体となって、旅のプランを企画し、地元の様々なステークホルダーと協働し、運営も高校生が担っています。

これらの活動から、地域の歴史や文化資源を教育資源として活用することのよさが見え、まちを様々なアプローチで学ぶことによって、シビックプライドの醸成につなげることができました。「マインからマインドへ」の活動と呼んでいますが、鉱山(マイン)からスタートした学びが、人と人との心(マインド)の交流へ深まってきました。そのことが子どもたちの自己有用感の発見につながり、アイデンティティの確立へと結びついてきています。また地域も変わってきました。学習の機会が増え、安全で快適に学べる環境が整備され、文化財(全て別子銅山関連)が増えました。そして別子銅山に関わる「新居浜市先人を未来につなぐ条例」が制定されました。さらに今年の 5 月には新居浜市は SDGs 未来都市に選出されました。「～先人の思いをつなぎ、シビックプライドを次のアクションへ～」がキャッチフレーズとなっています。

最後に、課題としては、地域の多様なステークホルダーとの連携などを通じて開かれたネットワークを構築することが挙げられます。ユネスコスクールの課題として、中心となっていた人物がいなくなると活動が厳しくなるということが挙げられていると思います。これからは人から人のみでなく、人から組織へのつながりとして、定着させる仕組みづくりが必要だと考え、それに取り組んでいます。小・中・高・大学・地域との学びの絆をさらに強くして、それを循環させる仕組み、「学びの絆サイクル」を構築していきたいと思っています。

## ■ コメント

ASPUivNet 加盟大学でユネスコスクールを支援している愛知教育大学の太田聖公教授より、事例紹介を受けて下記のコメントをいただきました。

- 
- ・ 地元には別子銅山があり、それをテーマにしながら、地元のことを調べていこう・明らかにしていこうということで、良いテーマが見つかったと考える。
  - ・ 地元のユネスコ協会さんとのつながりをきっかけに活動を広げ、「ユネスコ部」の活動を学校のカリキュラムにして脈々とつながっていくようにしたことは良い取り組みである。

- ・ 小学校・中学校へ学びのサポートをすることは、発表する高校生のみでなく、小学生や中学生も満足感を得られるのではないだろうか。小学生・中学生が地元のことを知ったり、「高校生になればこのようなことができるようになるのだ」と知ったりする良い機会になっていると考える。「自分たちもやってみたい」と思うことも期待でき、活動の継続性につながったのではないかと考える。
- ・ ガイドブック作成に関しては、単発で終わってしまうのではなく、小学校や中学校、地域の方、企業に広めていったことで、取組を地域に還元できたのではないだろうか。また地域の方が地元のことを学んだり、地域の素晴らしさを再発見できたりすることにつながったのではないだろうか。
- ・ 大事なのは地元から繋げていくことである。発表にあったように、人で繋げるのではなく、組織で繋げていくことが大切であると考え。中心人物のみが苦勞するのではなく、ステークホルダーの皆さんを巻き込むことで、連続的な繋がりにになっているのではないかと考える。
- ・ 今後、別子銅山をキーワードにしながら、「地元の先人たち」など学習を広げていくことが可能だと考える。子どもたちが新たなテーマを探し、それが地元にとって良い学習テーマ・課題となり、話題が広がっていくことを期待している。また、新居浜市を超えて愛媛全域・四国全体との連携といった、横との連携を広げていき、その中で改めて新居浜市がどのようなまちなのかを知り、新たな視点やテーマを得ることができると考える。
- ・ 先生のご発表から、継続的に取り組むことの大切さと、一校で終わりにせず周囲を巻き込むことの大切さを感じた。

## ■ 振り返り

河野先生の事例紹介と大鹿教授からのコメントを受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- 
- 小・中・高、地域、企業と繋がっていく力やそれを外に広げていく発信力が大事になってくる。
  - ユネスコスクールネットワーク(ASPUnivNet 等)を活用し、大学の先生などからアドバイスをいただくことで活動の幅が広がるのではないかと。
  - 地域に別子銅山のような素晴らしい資源がある地域がある一方で、そうでない地域もある。また、地域が観光地のようにとても注目されていて、子どもたちがそれを調べても、新たな発見がないような状況もあると思う。そういった場合はあえて注目されていないことに着目することも有意義なのではないだろうか。また地元と海外のつながりに目を向け、世界のなかでの地域の活動を考えることもできると考える。
  - 教員や生徒の認識を「自分事」にするために、テーマ設定の際に「自分が関わることができるもの」を考えていくことが重要だ。教科の教員がどのような情報を生徒に与え、生徒自身がどうつかみとれるかという視点が大切だ。
  - 都会の特徴として地域への愛着が薄いような場合もあると思うが、必ずしも地元ではなく、

「自分事のできるような課題」を見つけに行くことが今の時代では可能ではないだろうか。大変  
そんなことでも、まずは面白そうなところから始めてみるという第一歩が大事である。



[オンライン意見交換会の様子]

---

※次回は、2022年11月16日(水)16:00~17:00「1 から知る UNESCO」というテーマで開催  
します。お申込み方法などの詳細は、[ユネスコスクール公式ウェブサイト](#)内「最新情報」、[ユネスコス  
クール公式 Facebook](#)に掲載中です。ぜひご参加ください！